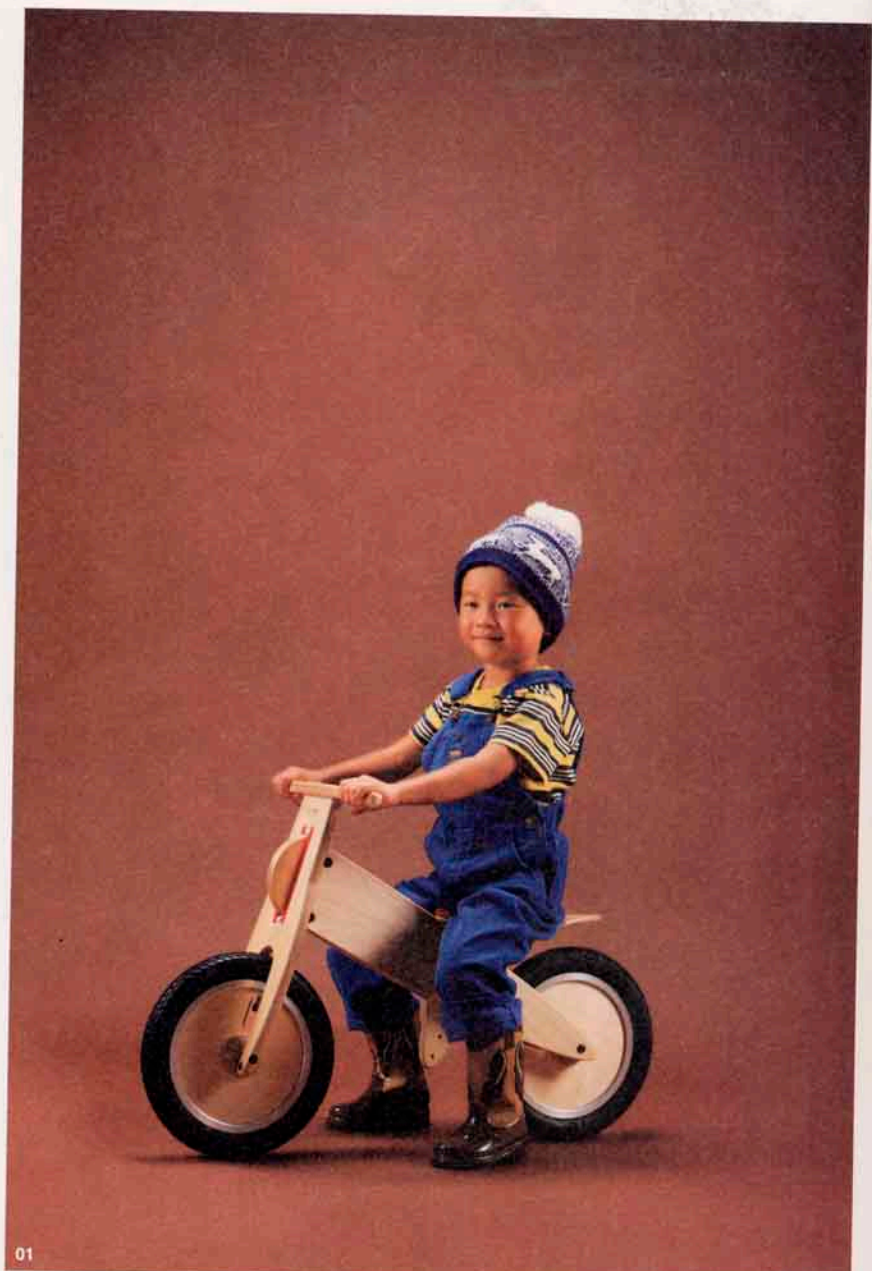


02*



news *02 LIKE A BIKE

素材に木材を選ぶことでユーザーのメンテナンスがより容易になり、長い年月使うことが可能。ドイツのクラフトマンシップ溢れるシンプルで機能的な造形が特徴だ 01.Mountain (エアインタイヤのアウトドアモデル) 価格3万9690円。02.焼き印されたロゴ。白木は乗り続けることで風合いを増し給色に 03.厚手のコットン生地が張られたサドル 04.指を挟むのを防止するために詰められているフェルト生地 05.少々のデコボコ道も安心なエアインタイヤ 06.Race (ロードレーサータイプのオリジナルモデル) 価格3万6540円 07.Jumper (アルミフレームの本格派モデル) 価格3万4440円 08.sporky (スポークホイールの軽量化タイプ) 価格3万7590円 ☎ノーザンスカイ ☎06-6281-1117



Photo/AOKI takenori (WPP)

三輪車ではなく
バランスバイクという選択

ドイツのシュピールグートに認定されている「ライクアバイク」は、1997年にドイツ人のロルフ・メルテンスと妻のベアトラにより設立されたコクア社の傑作だ。一体そのどこが傑作なのか。それは一目瞭然、本来あるべきものがこのバイクには見あたらない。

すばりそれはベダル。われわれの常識からすると、幼少の子どもに与える乗り物はベダル付きの三輪車と決まっている。理由は単純で、ベダルを漕ぐ行為と転倒を防ぐ行為を同居させつつ、バランス感覚を身につけさせるのだ。しかし、この保護的な考えに意義を唱えているのがライクアバイクだ。

まず、自転車に乗るために必要なバランス感覚を養うためにベダリングは必要ない。なぜならわれわれには足があるのだから。足で地面を蹴ることがベダルの役割を果たし、足を地面につけて立つことが補助輪の役割を果たす。そうして一度バランス感覚を身につけてしまえば、不思議と生涯忘れられることなく自転車に乗ることができるようになる。

自転車に乗ることは、立つことや歩くことに続く成長の大切な通過点だ。それをどのように経験させてあげるかは親次第。自分の身体と一体になって走るライクアバイクなら、自分の可能性を子ども自身が感じられるはず。三輪車ではなくライクアバイク、この選択肢でもう迷いはないだろう。